

# 「ターミネーターのなみだ」

## 三好学さん住作入賞おめでとう



第一八回ほのぼの童話館、創作童話募集四、〇一六編の応募の中から

「ターミネーターのなみだ」で見事、

佳作に入賞されたのは利用者の三好学さんです。その童話のあらすじを紹介しましょう。

『勉くんのパパのパパであるおじいちゃんはターミネーターの映画に出て来る人間そっくりのロボットのよう

で、革ジャンを着て大型バイクに乗っています。秋になると、銃を背中にショットでキジを撃ちに行きます。おじいちゃんは「俺はターミネーターなんだからね。血も涙もないんだよ」と誰も今までおじいちゃんが泣いたのを見たことがありません。ある日勉くんのパパの妹の純子お姉さんが結婚することになつて結婚式の日、純子お姉さんがパパにお礼の挨拶をするとターミ

ネーターそっくりのおじいちゃんの目から涙があふれ、勉くんはそれを見てやつぱりおじいちゃんはターミネーターではなかつたのだなと思った』というお話です。

童話のアイデアが浮かんでから二週間ぐらいで作品が完成しました。自分でもまさか同じコンクールで二度入賞出来るとは思つてなかつたのでそれだけにとてもうれしいです。このように童話作りをし、入賞することが出来るのも三恵ホームの環境が良いから出来るのでそれをとても感謝していますと話される三好学さんですが、これからもみんなを楽しませてくれる童話をたくさん作ってほしいです。



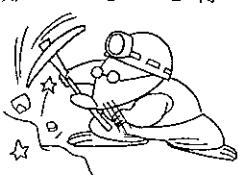
手が動きにくい人、むやみに「努力が足りない」とか「重りをつけて筋力をつけよう」と言う人がいるが、療護施設では間違っていることが少なからずある。訓練する前よりも悪くなる場合があるのだ。

何が間違っているのか?

ある一つの例は、ある関節を自力で動かそうとするとき、近くの関節が「あるパターン」で動く場合である。このようなときは、場合によつては全く筋力強化を行わない方がよいときもある。緊張が高まつて、動きが悪くなる場合があるからだ。

よく、「理学療法士（PT）」の仕事って、私にもできそう」と言われる方がいる。ある意味、その通りである。やってることはPTでないと難しい。これは作家の作業でも同じようなことが言える

しかし、どのような運動をどのような時期に行うかを計画判断し、状態を把握しながら施行する



ことはPTでないと難しい。これは作家の作業でも同じようなことが言えるだろう。

どんなことをテーマにするのか、どんな切り口で書くのか、どんなリティーを出すのかが難しいわけで、書くこと自体は楽だと阿刀田高は言う。このようなことはどの仕事でも共通なのだと思う。

しかしながら、最初に出した「手が動きにくい人」の例では、リハビリの勉強などしてない人の方が良い訓練方法を知っている場合もある。それは理論よりも体験で知っているのである。鶴呑みにはしないが、私はこのような情報提供をどちらかと言えば積極的に取り入れることにしていく。年令・性格・疾患だけでなく利用者の個人差を尊重しているからだ。

だから常に向上心を持ち、いろいろ興味深く探索することは、その後の仕事の見えない内容が変わってくると思っている。そしてそれはやがて、仕事の見える部分を変えることにつながると

見える仕事と見えない仕事

理学療法士 水田秋敏